



「パラサイト」の成功を呼んだ
難解な作品

おみたしんぺい
太田心平
民博 超域フィールド科学研究部

本年のアカデミー賞で、韓国映画「パラサイト」半地下の家族（以下、「パラサイト」）が主要部門の四冠に輝いた。「作品賞」に英語以外の作品が選ばれたのは初めてだし、カンヌ国際映画祭の最高賞「パルム・ドール」とのダブル受賞もじつに六五年ぶりだ。ごく普通の人の可笑しな日常を題材としつつ、社会を強烈に風刺するという奉俊昊監督お得意の作風は、コメディやスリラーやらといった既成のジャンルを越えていると、高い評価を受けた。また奉監督は、「そこまでやるか!」と仰天するほど徹底的に作品の細部を作り込むことでも有名で、「パラサイト」でも、上流階層を光、下流階層を陰のなかに映すとか、同じ画面に収まっている、両者のあいだには何らかの線がこっそり映し込まれているとか、またもや凝ったことをやってくれた。



弟ナミル(左)、妹ナムジュ(左から2人目)、主人公カンドゥ(右から2人目)
(提供:ピカンテサーカス、ディメンション、ハビネット・メディアマーケティング
©2006 Chunggeorahn Film. All rights reserved)

現代韓国を映し出す「グエムル」

そんな奉監督が二〇〇六年に韓国で大旋風を呼んでおきながら、国際的には失敗した作品が、今月紹介する「グエムル——漢江の怪物」(以下、「グエムル」)だ。米軍基地から垂れ流された汚水が水生動物を突然変異させてしまったことで、ソウルの中心部を流れる漢江に肉食の怪物があらわれる。河川敷で物売りをしな

がら、キオスクのなかで生活している主人公カンドゥは、一人娘を怪物にさらわれる。ところが、当局は娘の生存を信じてくれないばかりか、怪物に寄生する未知のウイルスの感染者としてカンドゥを隔離してしまう。そこでカンドゥは、同居する父や、弟妹とともに、自力で娘を助けようとする。

この「グエムル」は、家族愛を主題としたハリウッド的な特撮アクション映画の真似事のように誤解され

「グエムル——漢江の怪物」のワンシーン。怪物にさらわれる一人娘ヒョンソ(提供:ピカンテサーカス、ディメンション、ハビネット・メディアマーケティング
©2006 Chunggeorahn Film. All rights reserved)



がちだが、じつは奥深い隠喩と寓話に満ちている。いかにいかに加減な都合で政権や米軍が国民を切り捨てるか、愚弄された人びとはどんな苦渋から起き上がらなければならぬかなど、まさに現代韓国の核心的問題を訴えかけているのだ。

現代韓国の不条理

そもそも主人公の家族構成が面白い。カンドゥは、ボーッとした社会不適合者だが、動物的な勘が鋭い。弟ナミルは、兄と違って大学に行き、一九八〇年代の民主化学学生運動に加担したものの、その後は就職の時期を逃し、酒浸りの毎日。ストーリー内でも、運動世代の損失感や左派勢力の腕さを表現する。一方で妹ナムジュは、地方自治体に勤務するアーチエリー選手。ナミルとは逆に、無意識のまま政権からの庇護を享受した民衆の姿だといえよう。九三年の民主化以前にはじまったスポーツ選手育成政策では、人気競技だけでなく、韓国が国際舞台で活躍しやすい競技でも、有望な子どもたちが特化教育を受けた。アーチエリーの道で一流になれなかったのに、それ以外ではできないナムジュは、やはり「負け組」だ。そんな二人が力を合わせ、ナミルの火炎瓶とナムジュの矢がひとつになるシーンは、民衆の団結がもたらすインパクトを示すものとして、この映画のハイライトとなる。

ナミルとナムジュは、それぞれの名前にナムという一字が共通しているのに、カンドゥは違う。このことから、長男と弟妹とは、出自が少し違うのかもしれないと推測される。またカンドゥは、弟妹からも社会からも疎遠になり、偶然出会ったホームレスの男と怪物に立ち向かう。カンドゥと男のあいだには、既存の絆など何もない。カンドゥ(素の韓国国民の具現?)と娘(現代韓国の希望の具現?)との関係も重要なのだが、最後には血縁を越えた人と人とのつながりを描く、不思議なラストが待ってもいる。

朝鮮半島の人間関係は、血縁・地縁・学縁という型にはめられて論じられがちだ。でも、「グエムル」の主題は、やはりそんな旧式の枠組みにあてはまらない。むしろ、それらを突き抜けた先にある人と人とのつながり、国家と国民との関係、国際社会の不条理を描こうとしている。その他の登場人物がそれぞれ何を具現しているのか、登場する固有名詞やエピソードは実際の何を示すのか……。この映画の解釈は、まるで韓国文化論の授業の期末試験である。

「パラサイト」の原題が「기생충」(寄生虫)、「グエムル」の英語題目が「The Host」(寄生宿主)なのは、最初から意図していたわけではないらしい。ただ、「グエムル」が現代韓国をよく知らない作品中の意味と象徴が理解できない作品だった反面、「パラサイト」は万国共通の格差問題や映像表現を取り扱っている。わたしには、両者のあいだに「国内向けの荒削りモード」と「輸出用の成熟期モード」のような、対関係が見えてならない。